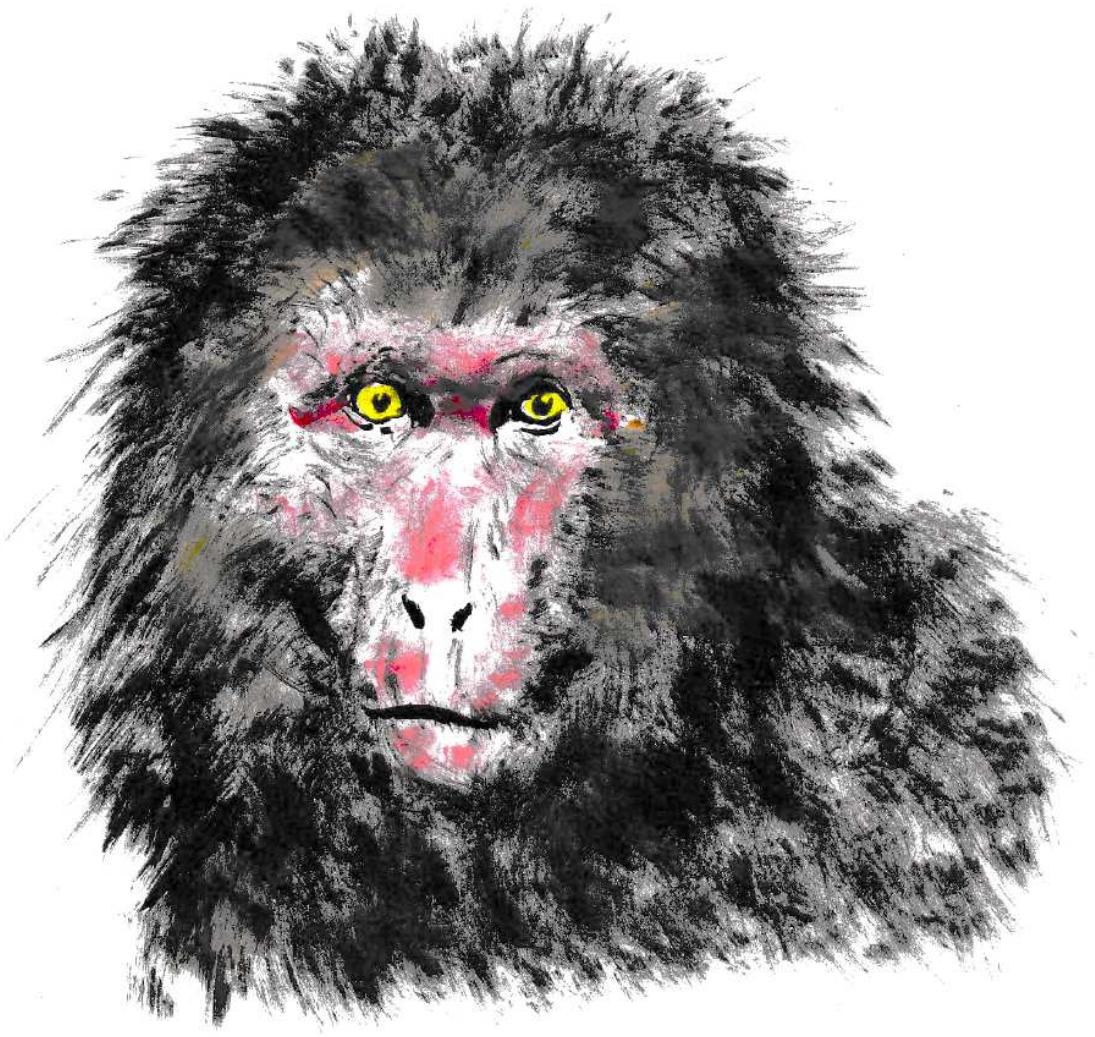


FIELD NOTE

no.168



**WILDLIFE
MANAGEMENT
OFFICE**

2025.10

目 次

FIELD NOTE 2025 年 10 月号 No.168

1	自由集会「哺乳類学に求められる『サイエンスコミュニケーション』を探る」 @哺乳類学会を終えて	林 航平
6	台北市立動物園における学び 哺乳類の保全の現状と新たな課題に関する報告	岩田 祐
9	ブナ科植物（ドングリ）との出会い探訪@東京	本橋 篤
12	海外研修報告-the 30th International Primatological Society Congress, 国際霊長類学会大会マダガスカル-	浅見 真生
19	新人紹介	大森 英明
20	WMO活動報告 2025 年 7 月～9 月	
5	表紙の絵	中嶋 英輝

自由集会「哺乳類学に求められる『サイエンスコミュニケーション』を探る」

@哺乳類学会を終えて

林 航平（ワイルドライフマネジメント事業部 計画策定支援室）

企画のきっかけ

緑豊かな江別の地、酪農学園大学で開催された日本哺乳類学会 2025 年度大会。熱気に満ちた研究発表が繰り広げられた4日間の最終日、2025 年 8 月 25 日、私たちは自由集会「哺乳類学に求められる『サイエンスコミュニケーション』を探る」を企画・開催しました。

近年、科学技術の社会における役割はますます大きくなり、研究者が専門分野の壁を越えて社会と対話することの重要性が叫ばれて久しいです。特に、愛らしい姿で人々を魅了する一方で、農林業被害や人獣共通感染症、あるいはクマ類の市街地出没といった深刻な社会問題の原因ともなる哺乳類を扱う私たちにとって、その研究成果を社会に分かりやすく伝え、多様なステークホルダーと対話を重ねていくことは、もはや避けては通れない責務と言えます。

しかし、こうした状況にもかかわらず、哺乳類学（あるいは野生動物管理学）におけるサイエンスコミュニケーション（以下、SC）はまだまだ黎明期にあり、研究者が持つ専門的な知見と社会とが十分に繋がっているとは言い難い状況です。研究者と社会との関わりには、まだ大きな隔たりがあると感じています。そうした問題意識を抱える中、筆者自身が北海道大学の科学技術コミュニケーション教育研究部門（CoSTEP）で SC を学んだ経験は、一つの転機となりました。そして、偶然にも学生時代からの知人であった須藤さん（文一総合出版）も CoSTEP を受講していたことが判明。さらに記憶を辿ると、北海道大学ヒグマ研究

グループの知人にも CoSTEP の修了生が複数名いることを思い出しました。

「野生動物の調査研究の経験や知見を持つ CoSTEP 修了生を集めれば、哺乳類学における SC の新たな可能性を探る、意義深い集会が開催できるのではないか？」

こうして、哺乳類学会で初となる「サイエンスコミュニケーションの自由集会」を企画・開催するに至りました。（ちなみに、学会が北海道で開催されたこと、そして CoSTEP が 20 周年記念を迎えたことなど、SC の自由集会を開催するのに様々な舞台が整いすぎていたのも、私たちの背中を押してくれた理由の一つです。）

多様な視点からの話題提供

本自由集会は、前述したような問題意識を共有し、哺乳類学に関わる SC の現状を多角的な視点から明らかにし、今後の新たな可能性を発見することを目的としました。企画当初は「30 名くらいが参加してくれれば御の字だろう」と考えていましたが、当日はその予想を大きく上回る約 50 名の方々にお集まりいただくことができました。会場に集まってくださった皆様の姿を前に、このテーマへの関心の高さがうかがえ、大変嬉しく思ったことを覚えています。

集会では、多様な立場で SC を実践されている 5 名の演者に、それぞれの立場から活動内容や課題、そして未来への展望を語っていただきました。

1. 野生動物管理を地域と協働する（林航平・株式会社野生動物保護管理事務所）

まず筆者の私、林からは、「野生動物管理は、サイエンスコミュニケーションの視点で見ると『欠如モデル』で止まっていないか？」という問題提起から発表を始めました。野生動物管理という分野は、黎明期から発展期を経て、現在は人口減少や市街地出沒といった新たな課題に直面する「飛躍期」にあるとされます。一方で、SCの歴史は、専門家が一方的に知識を伝える「欠如モデル」から、双方向の「対話モデル」へと変化してきました。この二つの歴史を重ねた時、私たちの現場でのコミュニケーションは、いまだに「市民は知識が欠如しているから科学を理解しないのだ」という前提に立った「欠如モデル」に留まっているのではないか、というのが私の問いです。私自身、入社間もない頃、ニホンザルの対策で「データ上はこうすれば被害は減ります！」と科学的な正しさだけを主張し、地域のマンパワー不足や高齢化といった「文脈」を無視して全く受け入れられなかった苦い経験があります。この反省から、受け手の状況を考慮する「文脈モデル」や、地域の経験知を尊重する「素人の専門性モデル」、そして意思決定に市民が参画する「市民参加モデル」の重要性を痛感しました。最終的に、これらの対話モデルを発展させ、科学コミュニティや行政、企業、メディア、そして一般の人々が連携し、地域に根差した知を共に産み出し継承していく「知産知承モデル」のエコシステムを、野生動物管理の分野

でこそ共創していく必要があるのではないかと提案しました。

2. 都市住民と野生動物問題を考えるコミュニケーション（伊藤泰幹・北海道大学）

伊藤（泰）さんからは、札幌市におけるヒグマの市街地出沒という喫緊の課題を題材に、都市住民とのコミュニケーションのあり方を探る「ヒグマテーブル」と名付けた先進的なワークショップの実践が報告されました。対策には住民参加が不可欠ですが、これまで行政と地域コミュニティとの双方向のコミュニケーションの場は十分にはありませんでした。そこで伊藤さんたちは、市の「ヒグマ対策重点エリア」に指定されている円山西町町内会と協働し、地図を用いたワークショップを企画・実践しました。このワークショップのユニークな点は、参加者が「クマ目線」と「人目線」の両方から地域を見つめ直す点にあります。「クマ目線ワーク」では、ヒグマがどこを通りそうか、何に誘引されそうかを地図上に書き込むことで、参加者は自らが暮らす地域の潜在的なリスクを主体的に発見します。次に「人目線ワーク」では、学校の通学路など、「絶対にヒグマに出てきてほしくない場所」を出し合い、その理由を共有します。このプロセスを通じて、参加者は専門家から与えられる「正解」を待つのではなく、地域の多様な価値観を互いに認識し、その地域ならではの適切な解決策、いわば「成解」を創り出していくのです。この取り組みは、SCが単なる知識伝達ではなく、地域の当事者意識を醸成し、具体的な行動変容や合意形成を促す強力なエンジンとなることを示す、説得力のある事例でした。





3. 地域の博物館と地域をつなぎたい（伊藤彩乃・愛媛県久万高原町 地域おこし協力隊）

ヒグマ研究の経験を持つ伊藤(彩)さんからは、クマのいない愛媛県久万高原町で地域おこし協力隊として活動するというユニークな立場から、地域のミュージアムを SC の拠点として活性化させる試行錯誤の様子が報告されました。人口約 7000 人のこの町には、山岳博物館、美術館、天体観測館という 3 つもの文化施設が存在します。しかし、町民にとっては「なんだか格式高い」という心理的な壁があり、その魅力が十分に伝わりきっていないという課題がありました。伊藤さんはこの状況を打開するため、SC の視点を取り入れた様々なアプローチを試みています。例えば、「遠い存在」だった学芸員の人柄を紹介するウェブ記事の作成や、「本」を媒介としたイベント「くまこうげんブック&ミュージアム」の企画です。別の切り口からアプローチすることで、これまでミュージアムに足を運ばなかった層を呼び込み、自然な形で町



の文化施設に興味を持ってもらうきっかけを創出しています。さらに、あえて町にはいない「クマ」をテーマにしたサイエンスカフェを企画するなど、外部のテーマを取り込むことで新たな関心を喚起する試みも進めています。伊藤さんの発表は、SC が地域に埋もれた資源の価値を再発見し、地域活性化へとつなげる触媒となりうることを、現在進行形の熱意と共に示してくれました。

4. ボードゲームで伝えるエキノコックス～「ECHINO!」の開発と運用～（石田隆悟・NHK エンタープライズ）

石田さんからは、人獣共通感染症であるエキノコックスという目に見えない脅威を、ボードゲームという誰もが楽しめる媒体で伝える画期的な取り組みが紹介されました。多くの人が抱く「なんとなく怖い」という漠然とした恐怖を、リスクを正しく理解し行動する「正しく恐れる」状態へと導くため、プレイヤーが能動的に関わる体験型のツールとしてボードゲーム「ECHINO!」が開発されました。このゲームの最大の特徴は、プレイヤーが「エキノコックス」そのものになりきり、「最も多く産卵すること」を勝利条件とする点です。恐怖の対象である寄生虫の視点に立つという斬新なコンセプトにより、プレイヤーは楽しみながら、キツネとネズミを行き来する複雑な生活環を自然に学ぶことができます。ゲーム盤には「ベイト散



布」というイベントが組み込まれており、駆虫薬の有効性を自らの「体験」として理解することができます。ルールブックさえあれば専門家がいなくても遊べる自己完結性から、公園でのワークショップや大学・高校の授業など様々な場面で活用され、テレビ番組などでも取り上げられています。石田さんの発表は、ゲームというメディアが持つ力を最大限に活用し、難解な科学的知見を「面白い体験」へと翻訳した、SC の実践例でした。

5. 本という媒体について（須藤哲平・文一総合出版）

最後の話題提供者である須藤さんには、出版社の編集者という立場から、「本にできることはまだあるかい？」という問いを掲げ、書籍という媒体が現代の SC において果たす独自の役割と未来への展望についてお話いただきました。まず、出版不況やマニアの市場がある鳥類や昆虫類に比べ、哺乳類は売上げにくいといった厳しい現実を直視するところから講演は始まりました。「作っただけでは売れない時代」において、「どんな本を、誰のために、どう作って、如何にして売るか」という戦略的な視点が不可欠であると指摘されました。その具体的な実践例として、須藤さんが編集を担当された『はじめて学ぶ哺乳類』の制作過程が詳細に紹介されました。この本は、「獣医学部の1年生だった頃の自分に届けたい」という思いから、高校生から大学初学者までを読者として明確に想定し、徹底した読者目線の編集方針が貫かれています。さらに、本は「出版したら終わり」ではな

い点が力説され、出版イベントや SNS 発信などを通じて、本をハブとした双方向的なコミュニケーションを創出する活動の重要性が示されました。

総合討論：多様な実践をつなぐ視点

5 名の話題提供を受け、後半は北海道大学の池田貴子さんをコメンテーターにお迎えし、フロア全体での総合討論へと移りました。池田さんからまずは、ご自身の都市キツネの研究やエキノコックス対策における SC の実践経験を踏まえ、「動物問題は人間問題である」という重要な視点が提示されました。観光資源としての「かわいいキツネ」と、感染症を媒介する「危険なキツネ」というように、同じ動物が多様な価値観の中で捉えられ、人々の間でコンフリクトが生じる。この構造は、話題提供にあったクマの問題とも共通します。

その上で池田さんは、今回の 5 つの発表を貫く共通の視点として「知産知承モデル」と「社会関係資本」という二つの概念を提示しました。「知産知承モデル」とは、科学コミュニティ、行政、企業、メディア、そして一般の人々といった多様な社会の構成要素が連携し、地域に根差した知を共に産み出し、継承していく SC のあり方です。まさに、5 名の実践は、それぞれ異なるアプローチでこのモデルを体現しようとする試みであると位置づけられました。

そして、そのモデルを駆動させるエンジンとなるのが「社会関係資本(ソーシャル・キャピタル)」、すなわち人々の信頼関係やネットワークです。住民同士の強い絆(ボンディング型)、市民と研究者といった異なる集団を橋渡しする関係(ブリッジング型)、そして行政や専門家と市民を結びつける関係(リンキング型)。SC 活動は、単に知識を伝えるだけでなく、こうした多様な「つながり」という財産を育むプロセスでもある、と池田さんは指摘しました。



おわりに

あっという間に予定の2時間が過ぎ、後ろ髪を引かれる思いで閉会となりました本自由集会。開催後のアンケートでは、今後の研究や実践に「活かすことができるものが得られた」という回答も同様に高い評価をいただきました。さらに、「次の哺乳類学会でも SC の集会があれば参加したいか」との問いには、ほぼ全ての回答者から肯定的な回答が寄せられ、このテーマに対する継続的な関心の高さが示されました。自由記述欄には、「SC のモデルについて新たな気づきを得られた」「具体的な事例が参考になった」といった声や、「今後も SC の集会を継続してほしい」という熱心な要望が数多く寄せられました。

もちろん、反省点もあります。哺乳類学会ではおそらく初となる SC の自由集会ということもあり、各登壇者の発表に熱が入り、話題提供のボリュームが大きくなりすぎてしまいました。アンケ

ートでも「対話型のワークや質疑応答の時間を増やしてほしい」というご意見をいただいたように、フロアの皆様との総合討論の時間を十分に確保できなかったことは、今後の課題として真摯に受け止めたいと思います。一方で、初の集会であるからこそ、SC の基本的な概念や多様な実践の全体像を丁寧に示すことは、今後の議論の共通基盤を作る上で避けては通れない過程であったとも考えています。

今回の集会は、あくまで始まりの一步です。この熱を一過性のものに終わらせず、継続的な情報交換や連携につなげていくことが重要です。

最後になりますが、ご多忙の中、快く話題提供をお引き受けくださった登壇者の皆様、そして活発な議論で会を盛り上げてくださった参加者の皆様、本集会の開催にご尽力いただいた大会実行委員会の皆様に、心より厚く御礼申し上げます。

表紙の絵

初めての挿絵は、筆の代わりにティッシュを使いました。思い通りに描けないその不確かさが、かえって野生の気配に近いように感じます。滲みや揺らぎの中に、サルたちの動きや空気がふと浮かび上がる。そんな偶然に身を委ねながら描いた一枚です。

中嶋 英輝（ワイルドライフマネジメント事業部 広島事業所）

台北市立動物園における学び

哺乳類の保全の現状と新たな課題に関する報告

岩田 祐（ワイルドライフマネジメント事業部 広島事業所）

I. 導入：動物園訪問の目的と台湾の生物多様性保全

台湾は、その地理的・地形的な特異性から、多くの固有種を擁する生物多様性のホットスポットであり、これらの種の保全は世界的にも重要である。

2025 年 8 月に筆者はプライベートで台湾旅行に出かけた。この仕事をしている以上、動物園は旅先で外せないと感じ、丸一日（開園から閉園まで）かけて展示と向き合ってきた。

台北市立動物園への訪問を通じ、台湾の哺乳類が直面する絶滅の危機と、それを回避するための具体的な保全活動、そしてその先にある人間との軋轢について学ぶ機会を得た。本報告では、タイワンツキノワグマ、タイワンヤマネコ、センザンコウに焦点を当て、これらの哺乳類の現状と、保全戦略について記述する。（一部展示文章を機械的に翻訳しただけの不自然な文章があるがご勘弁願いたい。）

II. 各種の保全プロフィール

1. タイワンツキノワグマ：科学的保全の成功と人間との軋轢

タイワンツキノワグマ（*Ursus thibetanus formosanus*）は、台湾最大の陸生哺乳類であり、アンブレラ種として高地生態系において重要な役割を担う。余談だが学名の一部の *formosanus* は「台湾の」という意味であり、台湾に生息する昆虫や両生類爬虫類等の多くにこの名前が付けられている。さらに余談だが、*formosa* とはポルトガル語で美しいという意味で、かつてこの島を訪れ

たポルトガル船の船員が、緑に覆われた島を見て「Ilha Formosa」と呼んだことが起源だと言われている。

タイワンツキノワグマはかつて、人間活動の拡大による生息地の減少と、漢方薬等への利用を目的とした密猟で絶滅の危機に瀕していた。1989 年施行の野生動物保育法（WCA）に基づきタイワンツキノワグマは「絶滅危惧種」に指定され、その後は法的に保護されている。玉山国家公園では、糞や体毛等を非侵襲的な方法からサンプルを得、DNA によって個体を識別する技術を用いた長期的なモニタリングを実施している。その結果、個体群が高い遺伝的多様性を保ちながら増加傾向にあることが確認されており、科学的な手法による基づいた保全（Evidence-Based Management）の成功事例となっている。

現在のタイワンツキノワグマにとっての主要な脅威は、商業的密猟に加えて、イノシシなどを目的とした汎用的なわなによる錯誤捕獲である。クマがわなに誤ってかかる事例は絶えず発生しており、個体群の存続を脅かす重要な問題となっている。

現在では台湾全体のタイワンツキノワグマの個体数は 200 頭～600 頭（1,000 頭を超える可能性もあるそう）と推定されており、依然として少ないもののその個体群の回復と活動域の拡大によって、人間とクマ間の衝突（HBC）のリスクを増大させている。近年、クマが人里近くに出没し、農作物や養蜂場への被害が深刻化しており、政府は電気柵の設置支援や遭遇時の対処教育などを実施し、タイワンツキノワグマの保護管理は「共存社会の設計」という新たな段階の管理に移行して

いる。

2. 石虎(台湾ヤマネコ):低地の危機と経済・技術による共存戦略

石虎 (*Prionailurus bengalensis chinensis*) は、台湾ウンピョウ (*Neofelis nebulosa brachyura*) の絶滅後、台湾に現存する唯一の在来ネコ科動物であり、主に人間の居住域に近い低標高の里山地帯に生息している。台湾ウンピョウの絶滅は 2013 年に宣言されたが、このことは「遅すぎた介入」として野生動物の保全に関わる人々に色濃く記憶されており、同じネコ科である石虎の保全においては早期に最大の対策を講じることの重要性が説かれている。

石虎は低標高の里山地帯に生息しており、人間の生活環境と重複している。このことが石虎を取り巻く大きな課題となっている。石虎の生息地は人間の生活環境で分断されており、常にロードキル(交通事故死)のリスクに晒されている。また、石虎が家禽類を襲う被害が発生することで、農家による報復的な捕獲のリスクが高まる。また、農村地帯である故に農薬や殺鼠剤による二次中毒のリスクも高い。台湾ではそんな石虎が抱えるリスクに対し、経済、技術、社会システムを組み合わせた対策を推進している。

例えば「生態系サービス給付金プログラム」が導入されている。これは農薬や殺鼠剤を使用しない等、石虎の生息に配慮した農法を採用する農家に助成金を支給する仕組みである。これにより、石虎の保全を地域経済の利益に直接結びつけ、報復的捕獲の動機を減らすことに成功している。また、ロードキル対策として、市民科学(citizen science)と行政が連携し、ロードキルのホットスポットを特定し、その地点に生態回廊やアンダーパスを通すなどの道路工学的な対策を積極的に導入している。また、ロードキルのホットスポットのデータは車のナビゲーションシステムと統合され、ドライバーが当該の道路区間を走行する際、音声と画像で注意を促し、制限速度内での走行を

奨励するものであり、これらにより交通事故の防止が図られている。

2017 年の研究報告では、石虎の推定生息数は 468 頭から 669 頭程度とされ、楽観視できない状況が続いている。その中で石虎の保全は絶滅の危機にある野生動物を救うだけでなく、里山の生態系や経済活動にも深く関わっており、人間活動のためにもなる重要な取り組みとして位置づけられている。

3. 穿山甲:世界的成功の背景と国内のユニークな脅威

台湾センザンコウ (*Manis pentadactyla pentadactyla* 以下、センザンコウと言う) は、肉や鱗が伝統医学で использоваться ために密猟の標的となり、IUCN のレッドリストで「絶滅寸前(Critically Endangered)」だが、台湾は強力な法規制と専門的な研究により、世界でも稀な保全成功例を収めており、その知見は国際社会に提供されている。

かつては組織的な密猟により台湾から国外へ大量に輸出されていた時代があったが、現在は台北市立動物園が保全の中心的な役割を担っている。20 年以上前から人工保育・繁殖に関する技術を世界に先駆けて開発しており、特に専用飼料の開発は、救護センターでのリハビリテーションにおいて重要な役割を果たしている。ワシントン条約等の国際的な仕組みにより密猟が沈静化した結果、センザンコウが直面する脅威はローカルな問題へと転換した。依然として、イノシシなどを対象とした汎用的なわなへの錯誤捕獲が外傷の主要因であることに加え、現在、センザンコウの生存を脅かす最も重大な台湾国内要因の一つが、野犬による捕食である。このことは、野生動物保全が公衆衛生や愛玩(伴侶)動物の管理といった異分野との連携を緊急に必要としていることを示している。一方で、台東県鸞山地区では、住民がセンザンコウを「地域の宝」として保護する地域主導の保全モデルも成功しており、地域社会の関与が保全の

持続可能性を支えている。

III. 結論と持続可能性に向けた展望(簡潔なまとめ)

台湾の哺乳類保全の課題は、絶滅の危機を乗り越える段階から回復した動物との持続可能な共存へと移行していることを知ったことが、今回の台北市立動物園での大きな学びである。

保全のために具体的に何をしたかについては引き続き勉強する必要があるが、保全の成功は科学

的データに基づくモニタリング、経済的インセンティブ、技術的な介入等、あるいはそれらの統合によって達成されてきた。今後、台湾ではタイワンウンピョウの絶滅という教訓を心に留め、クマの HBC 対策やセンザンコウの野犬対策等において、異分野、産官学といった連携が一層強化されるだろう。野生動物と人間社会が調和する共存社会を確立することが、今度の台湾の野生動物管理における重要な課題であると感じた。



園内の案内看板。日本人にも優しい。



解説は基本的に2言語（中文英語）。
理解するのに時間がかかりました。

ブナ科植物（ドングリ）との出会い探訪@東京

本橋 篤（ワイルドライフマネジメント事業部 計画策定支援室）

秋が深まり、紅葉の季節に差し掛かると、足元に転がるドングリを見つけることがあります。

この業界に身を置く者として、「ブナ科堅果」と聞けば、多くの人が野生動物の貴重な食料資源というイメージを抱くかと思いますが、一般の方には？が浮かぶかもしれません。「ドングリ」と聞けば、ほとんどの人が「ああ、あれね」と、幼い頃の記憶と結びついた記憶がよみがえるのではないでしょうか。

ブナ科植物は、ほぼ日本全国どこでも見られる広葉樹であり、私たちの身近な存在です。日本列島に広がるブナ科の森は、食料源としてだけでなく、地域ごとに異なる文化を生み出す基盤となりました。植物生態学者の中尾佐助や文化人類学者の佐々木高明らが提唱した「照葉樹林文化論」と「ブナ帯文化論」は、西日本と東日本の文化的な差異を、それぞれの地域を代表する森林の植生か

ら読み解こうとしたものです。その中でも、「ブナ帯文化」は、東日本から日本海側の冷涼な地域に広がる、ブナやミズナラなどの落葉広葉樹の森を舞台とした文化圏です。（ざっくりですが）東日本では、米の代わりにヒエ、アワ、ソバといった雑穀の栽培や、狩猟、山菜やキノコの採集が主な生業でした。建築や道具にはブナやナラの材が用いられ、牛よりも馬が重要な家畜として利用されるなど、照葉樹林文化とは大きく異なる生活様式が育まれました。東日本でソバ食が広まった背景には、ブナ帯の気候に適した焼畑耕作があったと考えられています。このように、過去的生活様式は照葉樹林・ブナ林から生まれた文化であるとも言えます。

ブナ林から生まれた文化もありますが、ブナ科植物自体の現代にかかる文化や歴史もちろん存在します。現代で、それもコンクリートジャング



写真1 多摩市に植えられているマテバシイとアスファルトに落ちたドングリ

ルと呼ばれる都市の風景に目を向けてみると、私自身も都心に近い場所で暮らしていますが、この時期になるとアスファルトの歩道にドングリが散らばっている光景に出会います。都内の街路樹や公園にもブナ科植物は植栽樹として存在していることがわかります。

ブナ科の樹木、特にマテバシイやシラカシといった常緑広葉樹は、意図的に都市の景観に取り入れられてきた歴史があります。東京都内の公園や街路樹として、これらの木々が選ばれてきたのには理由があり、その1つが優れた機能性です。マテバシイやシラカシは、都市特有の公害に強く、密生する枝葉は古くから防風林や防火林として重宝されてきました。江戸時代の屋敷では、生垣としてこれらのカシ類含めた常緑広葉樹を植え、火災の延焼を防ぐ「屋敷林」を形成していました。常緑広葉樹は葉に多くの水分を含むため、燃え広がりにくい性質を持っています。例えば南房総地方などでは、こうした植栽文化が地域の景観と安全を作ってきた歴史があります。現代の都市計画

においても、防災機能への期待から街路樹として選ばれる一因となっています。つまり、街角のドングリの木は、単なる緑の装飾ではなく、私たちの生活を守るために配置された、生きているインフラの一部でもあります。

現代に話を戻します。色々な出会いから身近な存在といえるであろうブナ科植物は、そこから新たな経験・文化が生まれることもあります。例えば、都内の公園に植えられたドングリは、子どもたちの遊びの1つとなり、自然へ触れる貴重な第一歩となります。さらにはキャンプで使うための炭として使われたり、ブナの木を使ってスプーンを作ったり、ドングリを練り込んだおしゃれなクッキーを作ったり。さらには、日常と身近になり関心度が高まってくると、ドングリがグッズ化してきます。特に、私はこうしたブナ科植物にまつわるモノを、見つけるたびにひたすら収集しています。ブナの木で作られたスプーン、ドングリをモチーフにした雑貨などなど。たまに、ドングリグッズを集めるアラサーである自分に客観が入りますが、クマが好きな人がクマのグッズを集めた



写真2 日野市の市議会広報誌。市の木として「かし」が登録されている（成長は遅くとも安定していることから、着実に発展する日野にふさわしい木である、とのこと）ことから、かしのドングリとされるイラストが描かれています。

り、好きなアイドルのグッズを熱心に手に入れたりするのと同じように、これは私にとっての一種の「推し活」みたいなものだと思っています。

このように、東京都内のブナ科植物と人との関わりをざっと見るだけでも色々な関わりがあることがわかるかと思います。今回は植栽樹とグッズ化されたブナ科植物を見ましたが、食文化、酒文化、インテリア利用、信仰としてのブナ科植物など、まだまだ話が尽きません。が、情報量の多さがとんでもないことになるので、また別の機会に執筆したいと思います。

みなさんも推しの生き物と人との関わりを調べてみるとワクワクすることがわかるかもしれませんよ！



写真3 昭和記念公園内にある遊具。植栽されたいるどんぐりをいろんな場所に入れて転がせる遊具です。大人気でした。



写真4 ドングリのイラストが描かれたトートバッグ。

海外研修報告-the 30th International Primatological Society Congress,

国際霊長類学会大会マダガスカル-

浅見 真生（ワイルドライフマネジメント事業部 関西支社）

〇はじめに

WMO では野生動物の保護管理、生物多様性保全の発展に寄与することを目的とした研究助成制度・海外研修制度を設けています。筆者は 2025 年 7 月に会社の海外研修制度を利用し、国際霊長類学会でポスター発表を行いました。学会の様子をお伝えするとともに、夏季休暇をいただき訪問したアンダシベ Andasibe の自然保護区の動物たちと現地の自然保護活動の様子をご紹介します。

国際霊長類学会は、その名の通り非ヒト霊長類（サル・類人猿・キツネザル等）の科学研究を促進し、霊長類のすべての種の保全を推進することを目的とする学会です。2 年ごとに国際会議を開催しており、第 30 回大会は 2025 年 7 月 20 日～25 日にマダガスカルの首都アンタナナリボ Antananarivo にて開催されました。当初の予定では同年 8 月 10 日～15 日に開催される日程でしたが、マダガスカル政府が開催する南部アフリカ開発共同体サミットのために学会会場が使用不可となり、急な会期の変更がありました。開催の約半年前のアナウンスだったため、既に航空券を購入していた参加者には大打撃です。高価な航空券を再度購入するのか、学会は諦めて現地でのバカンスに切替えるのか、SNS では混乱の様子がうかがえました。筆者は幸運にも航空券を手配する前だったので事なきを得ましたが、こうしたトラブルは海外の学会あるあるでもあります。現地で暴動が起きる、伝染病が流行する、自然災害が発生する、こうした問題により参加を諦めた国際学会がいくつもあります。行けるときに行っとく、こ

れに限ります。

マダガスカルは、アフリカ大陸の南東、インド洋上に位置する島国です。日本の約 1.6 倍の面積がある世界で 4 番目に大きな島国であり、長い間大陸から隔離されてきたため、他では見られない動植物が非常に多い「生物多様性ホットスポット」とされます。霊長類ではキツネザル類が有名で、100 種を超える大小様々なキツネザルが生息しています。童謡で有名なアイアイもマダガスカルの生き物です。一方、マダガスカルの森林破壊は深刻な状況にあります。焼き畑農業や燃料用木材の利用、ローズウッドなど高級木材の違法伐採や輸出により、自然林の面積は著しく減少してきたとされています。また、世界最貧国の一つでもあり、2025 年 10 月には軍が政権を掌握し大統領を追放するなど、政情不安の問題も抱えています。国際学会への参加・発表に加えて、こうした文化や自然環境、政治の状況が日本とは大きく異なるマダガスカルの自然保護活動の取り組みを知ること、海外での保護管理の現状の理解を深め、見識を広げることを目的として渡航しました。

〇学会参加

飛行機を乗り継ぎ約 24 時間かけて到着したイヴァト国際空港から、首都アンタナナリボまで田んぼや牛の放牧地など、のどかな田園風景が続く道を移動します。街に近づくにつれて車や人が増え、住居や露店、都市での生活の様子が見えてきます。高層ビルこそないものの、人の往来は多く商店は賑わい、活気のある街並みでした。



アンタナナリボの街並みとマーケット



毎日 9 時・15 時のティータイム

学会はホテルを併設したコンベンションセンター Novotel Convention で開催され、発表者だけでも 600 名以上が参加（現地/オンライン合わせて）する大型の大会です。大会 2 日目から 5 日目にかけて、シンポジウム、口頭発表、ワークショップ、ラウンドテーブルが 7 会場同時進行で、またポスター発表が 2 夜に渡って開催されました。清潔で快適な会場には高速の Wifi も飛んでおり、毎日 2 回のティータイムとビュッフェ形式の昼食が提供されます。日本の学会では見たこともないような豪華で彩り豊かな食事が提供され、大満足でした。屋外テラスでのオープンな食事の場が日に幾度も設定されていることで、各国の研究者と気軽に話すことができました。

発表者の登録者数をみると、多い順にアメリカ 152 人、マダガスカル 131 人、ブラジル、イギリスが続き日本が 26 人でした。オンラインの参加者も含むため現地での参加総数は不明ですが、欧米諸国の研究者の指導と支援を受けて、現地で研究を行っているアフリカ出身の研究者や学生、調査助手による基礎的な生態研究に関する発表が目立って多かったです。また、保全を目的とした生息地の評価や地域活動、ドローン等を用いた最新技術によるモニタリングなどの研究発表に加えて、人間と非ヒト霊長類との軋轢を題材とした発表も様々な種・地域からの報告があり、興味深かったです。



学会会場

人間と非ヒト霊長類との軋轢として代表的なものが、アフリカ地域におけるヒヒ類（Papio 属など）の問題、およびアジア地域におけるマカク類（Macaca 属）の問題です。これらに加えて、アジアのコロボス類、南米のフサオマキザルや、アフリカのチンパンジー・ゴリラといった大型類人猿との間でも保護区域とその周辺の農地や人里で生じる問題が報告されています。ヒヒ類とニホンザルの属するマカク類は、いずれもオナガザル科に属する雑食性の霊長類で、非常に高い環境適応能力を持っています。こうした特性により、農作物被害や生活環境被害、人身被害といった衝突がアフリカ・アジアの各地で発生しており、対策と共存の在り方が課題となっています。

今回の学会で発表された事例として、インドの例を取り上げます。インドには、複数種のマカク類、ラングール類、ロリス類、テナガザル類が生息しており、多様な霊長類が分布しています。アカゲザル *Macaca mulatta* などの一部を除く多くの種は、生息地の喪失や森林の断片化により、絶滅の危機に直面している状況です。

Maria Anjum 氏の発表では、インド東部アッサム州に生息するゴールデンラングール *Trachypithecus geei* が、ライチやマンゴーなどの果樹を荒らし住居周辺に出没することが問題となっていることが紹介されました。対策として、本種を地域の自然保護の「シンボル種」としてエコツーリズムに活用し、観光による恩恵を地域にもたらすことで、地域の自然資源を「保護すべき資産」として住民が再認識するきっかけをつくり、保全と地域振興を両立させているそうです。一方、同地域ではアカゲザルによる家屋への侵入や作物被害も深刻であり、ゴールデンラングールとは対照的に「嫌われ者」となっています。行政が捕獲許可を出しても、住民の多くが殺傷を拒むため捕獲は進んでいないようです。日本でもニホンザルに対して「人に似ているから殺したくない」という心理が見られますが、インドではヒンドゥー教のサルを神としたハヌマーン神が崇められているため、宗教的信念がさらに深く根付いているようです。結果として、捕獲や駆除ではなく、防除に頼らざるを得ない状況ですが、現地の脆弱な電気柵などでは十分な効果が得られず、対応に苦慮している様子が伝えられました。さらに、筆者の大学院の同卒生である Himani Nautiyal 氏にインドの他地域の状況を聞いたところ、インド国内でも地域によって宗教観が異なり、ヒマラヤ周辺ではマカク類が、南インドではラングール類が神聖視されるなど、同じ霊長類でも住民の受け止め方が異なっているようです。このように、インドではサルの殺生をともなう捕獲は受け入れられず、決して食べない文化がある一方で、隣接するネパールでは一部地域でサルを食用とする習慣もあると

のことで、国外や国内の地域によって大きく異なる価値観が存在し、保護管理のアプローチに密接に影響を与えていることを実感しました。

大学院でマカク類の研究をしていた身としては、ニホンザルを含むマカク類が嫌われ者として扱われているのを悲しく思います。WMO に入って彼らの賢さとしたかさに由来する問題の大きさに直面し、同じように、またそれ以上に困っているであろうアジアの状況を知るにいたり、何とかこの問題を軽減していきたいと思うようになりました。

日本の現状を、インドにおける霊長類研究・保全の第一人者である Jihosuo Biswas 氏にお伝えしたところ、サルによる被害が大きく始めは保全活動に反対していた地域であっても、地域の自然の価値を伝える教育や啓蒙活動、サルの被害が発生しない資産価値の高い樹木の植樹等の活動を組み合わせることで、地域住民の理解と協力を得て保全を成功に導いた事例を教えてくださいました。また、「単純な保全か駆除かという二項対立ではなく、その間を諦めずに模索するアプローチが重要である」という示唆をくださいました。インドと日本という異なる文化の中で、霊長類との関わり方には共通点もあれば違いもあります。こうした地域の事例を知ることで、動物側の科学的な知識だけでなく、地域ごとの歴史や文化、宗教の考え方をよく理解し、人側の理屈や気持ちに寄り添って対策を展開していく重要性を改めて感じました。

筆者は2日目のポスターセッションにて、福井県の加害群と自然群の行動圏利用について発表を行いました。発表の中で、日本における被害防除対策の手法や、地域個体群の存続を担保しながら加害度の高い群れや個体に対して個体数調整を行っていることを紹介すると、アジア・アフリカ圏の研究者から対策や捕獲の手法、その効果についての質問が多くありました。特に多かったのが「電気柵は効かない」という意見でした。サルが「棒で電線をズラして入ってくる」、「最初だけで

効果がなくなった」、日本でもよく耳にする話です。ニホンザルの対策手法はほぼ確立されており、使い勝手のよい効果的な電気柵が開発されています。国内に限らず、国外にも効果的な柵の設置と管理方法の普及の余地はまだあります。一方で、スケールの違う大規模な圃場の守り方には日本とは違ったアプローチが必要だと感じました。

他国の被害防除対策の事例として、モザンビークではヒヒ類の被害に対して、カカシや天敵であるワシの絵の掲示（効果なし）、ハチの巣箱を回廊状に畑の周囲に設置するハチの巣柵、問題行動を起こすオス個体への発信機首輪の装着、および問題個体の他所への移送など様々な対策を試みているそうです。他所への移送は、アフリカではしばしば取られる手法のようで、ケニアでも100頭を超えるヒヒの群れを麻酔をかけて移送した事例があるようですが、詳細な状況は分かりませんでした。また、同じくヒヒ類による被害の大きい南アフリカ共和国では、問題個体の捕獲や群れの全頭捕獲を実施しているようです。さらに、中東サウジアラビアでもヒヒ類の市街地への進出が問題となっており、問題行動を起こすオス個体への発信機首輪の装着と追跡により追払いを実施しているとの情報が得られました。各国の様子を聞いてみると、どうやらヒヒ類の対策とマカク類の対策には共通するスキームが適応できそうです。



賑わうポスター会場

学会に参加し、世界の霊長類研究の新たな手法や成果、各国の保護管理の現場の取組みを学び、活発な議論に触れられたことは大きな収穫でした。特に印象に残ったのは、各国における保護管理の現場で生じている地域ごとの課題・工夫の共有でした。「人と野生動物の関係性」や「獣害」の問題が、霊長類においてもアジア、アフリカなど多くの地域で共通の課題であることを実感するとともに、若手研究者の発表やポスター会場にも活気があり、熱量を持って取り組む同志が世界に大勢いることに大きな刺激を受けました。各地域の状況に合わせた教育や、地域システムの構築の好事例などを共有し、日本の対策の手法を導入することで解決できる問題があると感じました。一方で、各地域の宗教観や自然観、経済的・社会的な背景などを十分に考慮したアプローチが必要であることも強く感じました。ある意味で、日本の地域ごとの多様な状況も、こうした国際的な課題の縮図のように思えました。



マダガスカルの桑田佳祐（恐らく）の爆音Live
とダンスパーティで締めくくるバンケット

○アンダシベ訪問

学会終了後、首都アンタナナリボから車で約4時間ほど東へ移動し、アンダシベを訪れました。移動中は、田園風景とユーカリ林が延々と続きます。ユーカリは成長が早いいため植林に好まれる樹種で、現地では建材や調理用の炭などに利用されています。マダガスカルの森林の大半はユーカリ

林に置き換わっており、現在では赤い樹皮の目立つユーカリ林のある風景がマダガスカルの典型的な風景となっているようです。



田園風景とユーカリの植林（奥）

標高約 1,000 メートルに位置するアンダシベは、高温多湿な熱帯性気候に属し、訪問した 7 月は乾季にあたります。旧宗主国であるフランスの植民地統治時代に鉱山開発や林業によって栄えた町です。その後、独立とともにこれらの産業は衰退し、森林は自然保護区へと転換され、現在では観光業が地域の中心的な産業となっています。

この地域には、アンダシベ・マンタディア国立公園 Andasibe-Mantadia National Park や複数のコミュニティ・フォレスト（地域住民が主体となって森林を共同管理し、得られる利益を地域に還元する森林管理区域）が隣接して存在し、キツネザルの最大種であるインドリ *Indri indri* や多様なカメレオンなど野生生物の生息地として有名です。現地の報道によると、2023 年には約 3 万人の観光客が訪れ、そのうち約 30% がマダガスカル国内からの観光客だったそうです。

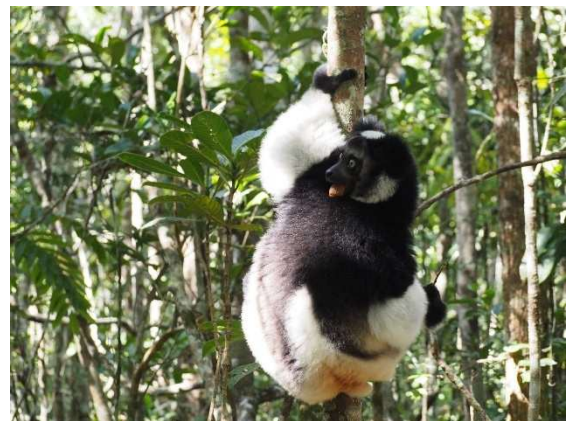
森に入るためには、必ず現地のガイドを帯同させる必要があります。アンダシベ村のガイドは皆ガイドの資格を取得したフリーランスで、資格を得たガイドは国立公園や管轄の異なる複数のコミュニティ・フォレストの森を自由に選んで客を案内することが出来ます。ガイドによって対応でき

る言語は異なり、マダガスカル語、フランス語、英語を操るガイドがいました。



現地の女性ガイド。夫婦共にガイドをしている。

インドリは家族単位でグループを作り、移動しながら生活しています。人付けされたインドリの群れの位置はガイドが毎日追跡して把握しており、林内のトレイルを案内して群れまで連れて行ってくれます。インドリは 10 kg にもなる大きさと歌うキツネザルとしても有名で、2~3km も響く大きな声が目印となり、森に近づくと群れのいる方向を知ることが出来ます。



ガイドに呼ばれ降りてきたインドリ

インドリを探す道中、運が良ければ他のキツネザルも観察することが出来ます。私は 4 日間、昼間のツアーに参加し、ブラウンキツネザル *Eulemur fulvus* やダイアデムシファカ *Propithecus diadema*、クロシロエリマキキツネザル *Varecia*

variegata、ハイイロジェントルキツネザル *Hapalemur griseus* を見る事が出来ました。高い樹の上で団子状に丸まって休息するクロシロエリマキキツネザルは、双眼鏡越しにお尻を観察できたくらいの出会いでしたが、野生の姿をゆっくりと観察できたことは大きな喜びでした。



樹上で果実を食べるブラウンキツネザル

人付けされたキツネザルと観光客の距離は思ったよりもだいぶ近く、ガイドからは触ったり騒いだりしない限り止められることは無さそうでした（お行儀の悪い観光客はいなかったので本当のところは分かりませんが）。学会直後とあって霊長類学会関係者が大集合しており、林内で顔見知りの研究者と再会することもしばしば。大盛況でした。

最接近したインドリやダイアデムシファカは、5mくらいには近づいていたと思います。頭上を飛び越していくインドリを追いかける時間は、何にも増して楽しい時間でした。屋久島の西部林道を彷彿とさせる驚きの人付けの程度でした。

一部のコミュニティ・フォレストでは、インドリの好む若葉を使って手渡しで餌を与えており、感染症の危険や、エコツーリズムの在り方に思うところはありつつも、地球の裏側から見に来たのだから、動物を間近でこの目に焼き付けておきたいという思いは誰しも同じなのでしょう。一般の観光客も、学会参加者も喜んで至近距離からの観察を続けていました。ツアーに参加すれば高確率

で目玉の動物を見ることのできる状況を作っておく、この体制により多くの観光客を誘致できれば、それだけ地域の経済は潤い、森林を維持する資金を得ることが出来ます。現地の自然を守るために、何が最適な落としどころであるのか、考えていく必要があると感じました。



観光客に囲まれるダイアデムシファカ

アンダシベでは、ナイトサファリも楽しむことができます。夜の森では、夜行性のアヴァヒ *Avahi laniger* やネズミキツネザルの仲間、休息中の鳥類、カメレオン、多様なカエルや昆虫を観察することができました。キツネザルの目には「タペータム」と呼ばれる反射層があり、暗闇でライトを当てると目が輝いて見えるのでシカのライト



カメレオンの一種

センサスと同じ要領で活動している個体を探すことができるのです。これらのキツネザルたちがアンダシベ村の集落のすぐ裏手、林縁部にも出没していたことは驚きでした。人家の近くにまで姿を見せる彼らの存在は、人と野生動物とが共存していく一つの理想的な形であると感じました。

ガイド業やエコツーリズムによって恩恵を受ける住民が森の保護や管理に価値を感じている一方で、他の産業に従事する住民との間には意識の違いや経済的な格差があり、これが地域の課題の一つとなっています。焼き畑農業以外に生計手段を持たない農民が、持続可能でない形の焼き畑を続けることで、時には国立公園やコミュニティ・フォレストの保護林にまで火が広がり、延焼してしまうこともあるそうです。コミュニティ・フォレストでは、焼き畑をしなくても生産できる代替作



アンダシベの森とガイド



地域性苗木の苗畑

物の導入や、農業技術の普及、また地域性苗木を用いた植樹の活動などを実践しており、こうした活動にはエコツーリズムによる収益だけではなく外国のファンドによる資金面でのサポートを必要としています。

○おわりに

今回の海外研修を通じて、霊長類研究の最前線や多様な保護管理の実践事例を知ることができました。特に、異なる文化・宗教・経済背景をもつ地域において、科学的知見に加えて地域社会との連携や共感が不可欠であることを実感しました。また、アンダシベの訪問を通じて、エコツーリズムと生物多様性保全のバランスを模索する、現地での取り組みや課題も知ることができました。こうした、マダガスカルや世界の非ヒト霊長類の多くが絶滅の危機に瀕し保護を必要としている現状と、ニホンザルを取り巻く獣害の問題は一見全くの正反対の状況のように思われます。しかし、とある一種が減りすぎたから守る、増えすぎたから減らす、といった単純な構造ではなく地域の生物多様性の保全と、人との棲み分けや共存を目指すという観点から、通底する思いがあると感じました。今回得られた知見や国内外のネットワークを活かして、今後の業務に励みたいと思います。

海外研修制度および川道国際学術交流協会の国際学会参加助成のご支援をいただき、学会への参加と現地視察の機会を得ることができました。心より感謝申し上げます。現地では研究発表に加えて、国内外の研究者と直接交流することができ、多くの刺激を受けました。世界の霊長類研究の潮流と保護管理の現状を学ぶことが出来たことは、自分にとって非常に有意義でした。このような貴重な機会をいただけたことに、改めて感謝申し上げます。

新人紹介

はじめまして、本年10月からワイルドライフマネジメント事業部関東支社に配属になりました大森英明と申します。この場を借りて自己紹介させていただきます。

私は妻と娘（3歳）、柴犬（13歳）と八王子で暮らしています。

趣味は旅行、料理、サッカー観戦に加え、コーヒーは趣味の域を超えて自家焙煎しており、つい先日までECサイトやイベントで販売していました。

生まれは宮城県仙台市ですが、生まれて間もなく親の仕事の関係でアメリカへ転勤その後は香港とシンガポールに滞在していました。

動物にはっきりと興味関心を抱いたきっかけはシンガポール動物園の存在でした。シンガポール動物園は檻を極力使わず、動物の習性を活かした展示手法をとっている動物園で、頭上の木から木へ移動するチンパンジーやオラウータン、水浴びをするトラなどを見て心を躍らせていました。そのころに「いろいろな動物に関わる仕事をしたい」と考え、獣医師になるという選択肢を志すようになりました。



今も変わらずコーヒーの焙煎は続けています

その後北里大学の獣医学部に入学、青森という自然豊かな地でのキャンパスライフを満喫する中、就職先については決めきれずにいました。獣医を志したばかりのころにぼんやりと思っていた「いろいろな動物に関わる獣医師になりたい」という願望は変わらず持っていました。獣医学部のキャンパス見学や職場見学、大学の教授との会話などから「野生動物に関わる獣医師の仕事は（ほぼ）ない」という印象を持っていたので、自然と選択肢から外していました。そこでいろいろな動物を診ることができる獣医師になろうと思い、犬猫に加えエキゾチックアニマルの診療もできる小動物病院に入社しました。小動物獣医師時代は犬猫の他、ウサギ、カメ、ハリネズミ、フクロモモンガ、オカメインコなどの診察を行っていました。

小動物病院で基本的な診療について学んだ後、千葉県職員として、食肉衛生検査所や保健所に勤務しました。食肉衛生検査所では牛や豚などの食肉検査の他、野生鳥獣肉処理施設の衛生的な枝肉処理についての指導業務があり、そこで野生鳥獣とのかかわりを持つようになりました。猟師の方や野生鳥獣肉処理施設のスタッフ、地域住民の方々との交流を通じて、里山問題をはじめとした社会と野生動物との関わりについての課題意識強く持つようになりました。

その後の千葉県職員の業務は充実していましたが、「1つのプロジェクトにしっかり関わってみたい」想いから医療機器の開発業務の仕事へと転職しました。そこで多くのことを学びましたが、その一方で今後の自分の生き方についてしっかり棚卸する必要性を感じるようになりました。改めて「自分が何をしたいのか?」、獣医師を志した原点や、キャリアを通じた関心ごとに振り返りながら棚卸した結果、「野生動

物と社会との関わり」というキーワードに当てはまる仕事をしようという考えに行きつきました。

そうは言っても野生動物に関わる仕事はないと思っていた中で、偶然自宅からも近く、求人も募集しているWMOの存在を知りました。これはチャンスだと意を決してエントリーし、今に至ります。

入社後、WMOのスタッフの方には優しく丁寧に対応していただきながら日々を過ごしております。自然と動物との関わりについての考え方や意識の高さに刺激を受ける日々です。まだわからないことばかりでご迷惑をおかけしておりますが、着実に一歩ずつしっかり進んでいきたいと思っております。今後ともよろしくお願いいたします。



フクロモモンガへの投薬シーン。

咬まれると痛い。



WMO活動報告 2025年7月～9月

- 効果的な内水面水産資源被害防止技術開発事業委託〔水産庁〕
- 箕面国有林におけるニホンジカの生息状況外モニタリング調査委託事業〔近畿中国森林管理局〕
- ニホンジカ及びイノシシの個体数推定等業務〔環境省〕
- 尾瀬及び日光国立公園におけるニホンジカ捕獲調査業務〔関東地方環境事務所〕
- 富士箱根伊豆国立公園箱根地域シカ管理対策検討調査業務〔関東地方環境事務所〕
- 尾瀬及び日光国立公園ニホンジカ対策広域協議会運営業務〔関東地方環境事務所〕
- 関東山地ニホンジカ広域保護管理調査等業務〔関東地方環境事務所〕
- 国指定紀伊長島鳥獣保護区カワウ生息状況等調査業務〔中部地方環境事務所〕
- 国指定紀伊長島鳥獣保護区ドブネズミ対策手法検討業務〔中部地方環境事務所〕
- 四国のツキノワグマ錯誤捕獲等緊急対応業務（単価契約）〔中国四国地方環境事務所〕
- ツキノワグマ市街地出没対応訓練業務〔岩手県〕
- 宮城県カワウ個体群管理業務〔宮城県〕
- ツキノワグマ出没対策促進業務委託〔秋田県〕
- 避難地域鳥獣対策支援業務〔福島県〕
- カワウ行動追跡調査業務委託〔福島県〕
- 茨城県アライグマ防除実施計画策定業務〔茨城県〕
- 高原地域ニホンジカ行動調査業務〔栃木県〕

- 赤城山ニホンジカ及びイノシシ生息状況等調査業務〔群馬県〕
- 神津地区ニホンジカ及びイノシシ生息状況等調査業務〔群馬県〕
- 群馬県ニホンジカ生息状況調査〔群馬県〕
- イノシシ・ニホンジカ生息状況調査及び個体数推定業務〔埼玉県〕
- 外来種特別対策事業（アカゲザル等）業務委託〔千葉県〕
- ニホンザル生息状況調査等業務委託〔千葉県〕
- 大島キョン防除委託 組織銃器C〔東京都〕
- ニホンザル生息状況調査業務委託〔神奈川県〕
- ニホンジカ生息状況調査業務委託〔神奈川県自然環境保全センター〕
- 区画法新規区域設定調査業務委託〔神奈川県自然環境保全センター〕
- 公園緑地等維持管理工事 県単（その703）〔神奈川県厚木土木事務所〕
- 福井県サル群れ行動圏調査業務〔福井県〕
- 福井県ニホンジカ管理計画モニタリング業務〔福井県〕
- 山梨県中央線沿線ニホンジカ動態調査業務（大月エリア）〔山梨県〕
- ツキノワグマ生息等モニタリング調査業務〔山梨県〕
- ニホンジカ及びイノシシ生息等モニタリング調査業務〔山梨県〕
- ニホンジカ影響下の植生回復等調査業務委託〔山梨県森林総合研究所〕
- 岐阜県野生動物モニタリング調査業務委託〔岐阜県〕
- 岐阜県ツキノワグマ生息状況調査業務〔岐阜県〕
- GPSロガー装着によるカワウ飛来動向調査委託業務〔岐阜県〕
- ニホンザルGPSモニタリングモデル事業委託業務〔岐阜県〕
- ツキノワグマ生息実態調査業務委託〔静岡県〕
- ツキノワグマ生息環境調査業務委託〔静岡県〕
- ツキノワグマ専門研修講師派遣業務〔静岡県〕
- ツキノワグマ個体数調査業務委託〔愛知県〕
- ツキノワグマ保護等業務委託（単価契約）〔三重県〕
- 三重県ニホンザル生息状況調査業務委託〔三重県〕
- ツキノワグマ移動放獣業務〔滋賀県〕
- 指定管理鳥獣捕獲等事業（効果的捕獲促進事業）捕獲調査業務（伊吹山）〔滋賀県〕
- 森林動物行動圏等調査事業委託業務〔滋賀県〕
- ツキノワグマ保護管理事業〔京都府〕
- 野生鳥獣（ニホンジカ）生息動態調査業務〔京都府〕
- 野生鳥獣（イノシシ・ニホンジカ・ニホンザル）生息動態調査業務〔京都府〕
- 野生鳥獣（ツキノワグマ）生息動態調査業務〔京都府〕
- ツキノワグマ放獣業務委託〔兵庫県〕
- カワウ管理協議会の運営補助及び管理手法実証業務〔兵庫県〕
- 紀伊山地カモシカ保護地域第6回特別調査委託業務〔奈良県〕
- 奈良県ニホンザル生息状況調査業務〔奈良県〕
- 和歌山県ツキノワグマ保護管理対策業務〔和歌山県〕

- 有害ニホンザルの群れ捕獲業務〔和歌山県〕
- ニホンザルの生息状況調査（GPSを活用した群れ調査）業務〔和歌山県〕
- イノシシ生息状況調査業務〔和歌山県〕
- ニホンザル生息状況調査業務〔和歌山県〕
- 指定管理鳥獣（ツキノワグマ）放獣業務〔鳥取県〕
- 特定鳥獣生息実態調査業務〔鳥取県〕
- 指定管理鳥獣生息実態調査（ツキノワグマ）業務〔鳥取県〕
- 鳥取県ツキノワグマ等出没対応マニュアル作成業務〔鳥取県〕
- カワウ捕獲・被害抑制対策等業務〔鳥取県〕
- 指定管理鳥獣捕獲等事業実施計画策定調査業務〔鳥取県〕
- 島根県ニホンザル被害対策事業業務〔島根県〕
- 島根県集落点検事業業務〔島根県〕
- 島根県ツキノワグマ遺伝構造解析業務〔島根県〕
- 島根県ニホンジカ糞塊密度調査〔島根県〕
- 野生鳥獣調査事業（ニホンジカ、イノシシの生息数推定業務）〔岡山県〕
- 野生鳥獣調査事業（ニホンザル生息状況調査）〔岡山県〕
- 岡山県カワウ被害防止総合対策事業〔岡山県〕
- ツキノワグマ被害防止対策研修（市町村職員等スキルアップ研修）〔岡山県〕
- 堅果類等豊凶調査業務〔広島県〕
- 特定鳥獣等生息状況モニタリング調査・分析等業務〔広島県〕
- 広島県ニホンジカ林業被害実態等調査分析業務〔広島県〕
- 緊急銃猟研修業務〔広島県〕
- 緊急銃猟対応人材育成業務〔広島県〕
- わな免許取得者へ向けた捕獲・処理技術の向上研修業務〔山口県〕
- ニホンジカ個体数推定業務及び生息状況調査〔山口県〕
- 鳥獣被害対策アドバイザー支援業務〔山口県〕
- ニホンザル生息状況調査〔山口県〕
- ニホンザル対策強化事業〔徳島県〕
- シカによる森林被害緊急対策事業委託業務〔愛媛県〕
- 指定管理鳥獣（ニホンジカ）捕獲等業務〔石鎚山系〕〔愛媛県〕
- サル被害総合対策普及事業委託業務〔高知県〕
- かんしょ産地サル被害対策実証事業 ニホンザル生息状況調査等委託業務〔大分県〕
- ニホンザル発信機装着業務委託〔東京都八王子市〕
- サル個体数調査業務委託〔東京都檜原村〕
- 警戒システムGPS発信器装着業務委託〔東京都奥多摩町〕
- タイワンザル生態調査および計画策定委託〔東京都大島町〕
- クリハラリス生態調査および計画策定委託〔東京都大島町〕
- 大島町タイワンザル囲いわな購入〔東京都大島町〕
- 静岡市ニホンザル行動圏把握調査業務〔静岡県静岡市〕

- ツキノワグマ不働化業務委託〔三重県熊野市〕
- ツキノワグマ保護等業務委託〔三重県紀北町〕
- ニホンザル彦根C 1 群個体数調査委託業務〔滋賀県彦根市〕
- ニホンザル個体数・行動域調査業務〔滋賀県長浜市〕
- ニホンザル甲賀A群個体数調整業務委託〔滋賀県甲賀市〕
- ニホンザル有害捕獲業務委託〔滋賀県甲賀市〕
- 市街地におけるニホンザル有害鳥獣捕獲業務〔滋賀県甲賀市〕
- ニホンザル個体数調整業務委託（安曇川B群）〔滋賀県高島市〕
- ニホンザル個体数・行動域調査用GPS首輪取り付け業務委託（今津B群）〔滋賀県高島市〕
- ニホンザル個体数調整業務委託〔滋賀県日野町〕
- ニホンザルモニタリング調査業務〔滋賀県日野町〕
- ニホンザル個体数調整業務委託（多賀C 1 群）〔滋賀県多賀町〕
- 総合獣害対策事業 東山地域イノシシ等大型獣対策業務〔京都府京都市〕
- 総合獣害対策事業ニホンザル（京都A群）捕獲等管理業務〔京都府京都市〕
- 総合獣害対策事業久多ニホンザル（京都D群）捕獲等管理業務〔京都府京都市〕
- 総合獣害対策事業ニホンザル（亀岡A群）管理業務〔京都府京都市〕
- ツキノグマ出没防止に係る集落環境点検支援事業委託業務〔京都府京都市〕
- ツキノワグマ対策支援事業業務委託〔奈良県奈良市〕
- ツキノワグマ出没時安全対策業務委託（ツキノワグマ有害個体捕獲時対応処理委託業務）
〔鳥取県智頭町〕
- ツキノワグマ有害捕獲個体処理委託業務〔鳥取県八頭町〕
- 天然記念物臥牛山のサル生息地 天然記念物食害対策事業 ニホンザル発信機装着業務
〔高梁市教育委員会〕
- 天然記念物臥牛山のサル生息地 天然記念物食害対策事業 ニホンザル個体数調査業務
〔高梁市教育委員会〕
- サル被害総合対策モデル事業〔岡山県真庭市〕
- ニホンザル捕獲業務〔岡山県真庭市〕
- イノシシ市街地出没対策に係る捕獲業務〔広島県福山市〕
- 東広島市有害鳥獣アドバイザリー業務委託〔広島県東広島市〕
- 東みよし町ニホンザル行動圏等調査及び個体数調整業務〔徳島県東みよし町〕
- ニホンザル人的被害防止対策・捕獲業務委託〔福岡県那珂川市〕
- 有害鳥獣捕獲処理業務委託〔福岡県那珂川市〕
- ニホンザル生息状況調査等業務委託〔福岡県那珂川市〕
- サル用GPS首輪、GPS受信機器〔福岡県那珂川市〕
- ニホンザルGPS首輪データ解析業務委託〔福岡県那珂川市〕
- 福島県鳥獣被害防止総合対策交付金事業 ツキノワグマ生息状況調査業務委託
〔郡山市鳥獣被害防止対策協議会〕
- ニホンザル効果的捕獲促進事業業務委託（小綱木B群3年目）〔川俣町農林産物有害鳥獣対策協議会〕
- ニホンザル効果的捕獲促進事業業務委託（飯坂群）〔川俣町農林水産物有害鳥獣対策協議会〕

- 鳥獣害のない里づくり推進事業ニホンザルモニタリング調査業務〔大野市鳥獣害対策協議会〕
- ニホンザルGPS首輪装着業務〔越前市鳥獣対策協議会〕
- ニホンザルモニタリング・研修会開催業務委託〔池田町総合農政推進協議会〕
- 南越前町ニホンザル生息状況調査業務〔南越前町鳥獣害対策協議会〕
- 野生いのしし経ロワクチン野外散布に係る総括業務委託〔岐阜県経ロワクチン対策協議会〕
- 個体数調査業務委託〔大垣市鳥獣被害防止対策協議会〕
- GPSデータダウンロード業務委託〔大垣市鳥獣被害防止対策協議会〕
- ニホンザル生息状況調査等業務〔揖斐川町鳥獣被害対策協議会〕
- ニホンザルテレメトリー調査業務〔豊川市鳥獣被害防止対策協議会〕
- ニホンザル行動域調査業務委託〔四日市市鳥獣被害防止総合対策事業推進協議会〕
- 竹生島植生被害モニタリング調査業務〔竹生島タブノキ林の保全・再生事業推進協議会〕
- 北近畿東部地域ツキノワグマ生息動態調査等業務〔北近畿東部地域ツキノワグマ広域保護管理協議会〕
- 鳥獣被害防止総合対策交付金事業 大丹波地域ニホンザル篠山B群（園部A群）発信器装着業務
〔大丹波地域サル対策広域協議会〕
- ニホンザル捕獲業務〔福山市鳥獣被害対策協議会〕
- つるぎ町ニホンザル等捕獲駆除業務〔つるぎ町有害鳥獣対策協議会〕
- ニホンザル生息状況調査業務委託〔福岡市鳥獣被害対策協議会〕
- スマート捕獲事業 サルGPS首輪装着業務委託〔人吉市有害鳥獣被害対策協議会〕
- 自動撮影カメラ・熱赤外搭載ドローンによるシカ生息密度推定業務〔京都先端科学大学〕
- 第1期野生イノシシ経ロワクチン野外散布実施業務委託〔一般社団法人神奈川県畜産会〕
- 加美町ツキノワグマ捕獲追跡調査業務〔一般財団法人日本気象協会〕
- ツキノワグマ放獣業務〔特定非営利活動法人四国自然史科学研究センター〕
- 住居等の周辺における大型鳥獣出没対応検討業務〔一般財団法人自然環境研究センター〕
- 「低コスト再造林実証支援事業」に係る調査〔中江産業株式会社〕
- 長野県ニホンザル対策支援補助業務〔一般社団法人ニホンザル管理協会〕
- 東日本旅客鉄道株式会社八王子支社管内における野生鳥獣と列車の衝撃事故分析業務
〔東日本旅客鉄道株式会社〕
- 地域リーダー（森林）及び鳥獣被害対策コーディネーター育成研修事業における教材改訂及び研修会開催・講師等（委託）〔株式会社野生鳥獣対策連携センター〕
- ツキノワグマ出没対応研修（京都府）……………講師：中川
- 令和7年度ツキノワグマ出没時対応研修会第1回・2回（奈良県）……………講師：中川
- カワウ保護及び管理に関する検討会（環境省）……………検討委員：加藤（洋）
- 屋久島世界遺産地域科学委員会ヤクシカ・ワーキンググループ……………委員：濱崎
- 鳥獣被害対策データ活用促進検討会（農林水産省）……………委員：清野
- 福島県野生鳥獣保護管理検討会（ニホンジカ）……………委員：濱崎
- 神奈川県ニホンザル管理検討委員会……………オブザーバー：海老原・豊川
- 山梨県イノシシ・ツキノワグマ保護管理会議……………オブザーバー：奥村
- 静岡県カモシカ管理検討会……………委員：濱崎
- 静岡県ニホンジカ保護管理検討会……………委員：濱崎

- 静岡県カワウ食害防止対策検討会……………委員：加藤(洋)
- 滋賀県ニホンザル第二種特定鳥獣管理計画検討会……………アドバイザー：濱崎
- 滋賀県ニホンジカ第二種特定鳥獣管理計画検討会……………アドバイザー：濱崎
- 滋賀県イノシシ第二種特定鳥獣管理計画検討会……………アドバイザー：濱崎
- 徳島県イノシシ管理計画ワーキング会議……………委員：濱崎
- 徳島県ニホンジカ管理計画ワーキング会議……………委員：濱崎
- 福岡県特定鳥獣（イノシシ・シカ）保護管理検討会……………委員：横山
- 日本哺乳類学会 外来動物対策作業部会……………委員：白井・佐伯・渡邊
- 日本哺乳類学会 ニホンザル保護管理検討作業部会……………委員：清野・海老原・藏元
- 日本哺乳類学会 シカ保護管理検討作業部会
……………副部会長：横山、委員：濱崎・岸本・大西
- 日本哺乳類学会 クマ保護管理検討作業部会……………副部会長：中川
- 日本哺乳類学会 カモシカ保護管理検討作業部会……………委員：西村・関
- 日本哺乳類学会 イノシシ保護管理検討作業部会……………委員：竹内
- 日本霊長類学会 霊長類保全福祉委員会……………幹事：白井
- 日本野生動物医学会……………評議員：後藤
- 日本野生動物医学会 ニュースレター編集委員会……………委員：後藤
- 「野生生物と社会」学会 青年部会……………役員：本橋・渡邊
- 「野生生物と社会」学会 「野生生物と社会」編集委員会……………編集幹事：渡邊
- 「野生生物と社会」学会 ワイルドライフ・フォーラム誌編集委員会……………副編集委員長：本橋
- 日本生態学会 保全生態学研究編集委員会……………委員：岸本
- IUCN/Species Survival Commission (SSC)/ Primate Specialist Group/日本グループ……………メンバー：白井
- TWS/ The Wildlife Society / International Wildlife Management Working Group……………委員長：大西
- TWS/ Southeast Section of TWS……………秘書：大西
- TWS/ The Wildlife Society / TWS Japan Student Chapter……………とりまとめ役：大西
- 野生動物の形態、生理、生態等に関わるデータ・試料の蓄積
- 野外における野生動物の麻酔方法の検討

『FIELD NOTE』は会員の皆様の情報交換の場です。

各種お知らせ・イラスト・原稿・ご意見・ご感想を募集しています。

内容・分量・書式は問いませんので、お気軽にお寄せ下さい。

編集部一同、お待ちしております。

次号No. 169は2026年1月末発行予定です。

原稿は1月10日までにお願いします。



FIELD NOTE
フィールドノート
2025.10.31 No.168

発行：WMO／（株）野生動物保護管理事務所
〒192-0031 東京都八王子市小宮町922-7
TEL 042-649-1385 FAX 042-649-1386
URL <https://wmo.co.jp/>
E-mail WMO_fn@wmo.co.jp
発行責任者：奥村忠誠
編集：『FIELD NOTE』編集部
郵便振替：00140-4-63739 年会費：¥2,000

無断転載を禁ずる